「ボランティア道の本質」

2022 年 9 月 26 日
ミント神戸
神戸国際キリスト教会
牧師　岩村義雄

主題聖句: 使徒 7 章 34 節「私は，エジプトにいる私の民の苦難を見届け，その呻きを聞いたので，彼らを救うために降って来た。さあ，今あなたをエジプトに遣わそう」(『聖書協会共同訳』)。

＜序＞

9 月 18 日から 22 日，第 134 次東北ボランティアの稲刈りで長浜幼稚園(宮城県石巻市)の年長組の園児たちと楽しんだ。

神戸から 6 名で向かった。11 回目の稲刈りになる。神戸国際支縁機構の活動は，海外ボランティア，「田・山・湾の復活」，各種セミナーについて話題性を提供することがある。

本日は，ボランティア道に取り組むに際して，何を中心に，これまでぶれずに被災者に寄りそってきたかを報告させていただく。

(1) 精神障がい者との共生
(2) 路上生活者と協働
(3) ハンディキャップへの共振

第 11 次 西日本豪雨ボランティア 広島県呉市　右から二人目 松本真祐さん 2019 年 11 月 10 日 撮影 村上裕隆。
左から本田寿久，田村晋作，堀 浩一，筆者，西本正，西本美恵子，土手ゆき子，松本真祐，本田博之。

(1) 精神障がい者との共生

神戸国際支縁機構は，統合失調症のメンバーが核になっている風変わりなグループである。理事の中には，脳外科医として，淀川キリスト教病院の名誉院長もいる。白方理事は，言う。「20年前と異なり，統合失調症に対する医療は進歩しており，うつを含めて薬の効用が向上している」，と。

9・11 テロが起こった 2001 年から難民支縁から始まった。当初は，茨木市の収容センター訪問などで，劣悪な環境のため精神が錯乱するアフリカ，東南アジアの人々に接した[1]。しかし，機構の事務局，スタッフには，統合失調症のメンバーはいなかった。

東日本大震災における最大の被災地石巻市で，海から約 1 キロ，伊原津地区にある精神科の恵愛病院は，24 人が津波により犠牲になった[2]。1 階の天井まで津波が流れ込んだ。災害の牙は一番弱い部分をなぎ倒した。2012 年，傾聴ボランティアをしていた時，障がい者の行方安否[3]は近所，警察，行政もわからなかったことに衝撃を受けた。福島県でも，多くの要援護者が避難の際に命を落としている。

東日本大震災以降，定期的に神戸からのボランティアに参加を希望する大学生，若者たちが日ごとに増し加わるようになると，いろいろな参加者のスクランブルの様相になった。在日，外国人，中学生も珍しくなくなってきた。2012 年 2 月，宮城県石巻市渡波の第 9 次の漁ボランティアで海苔の養殖に参加した松本真祐さん(当時 32 歳)は，極寒の石巻湾で献身的に働いた。当時，無職であり，求職中であった。帰神後，兵庫駅前にある阪神・淡路大震災の復興住宅の傾聴ボランティアにも自発的に参加された。訪問先は，神戸市から司法に訴えて，追い出された兵庫区キャナルタウンの吉山隆生さん(当時 60 歳)の家である。退去を迫られ，行くあてがない無職の吉山さんの窮状を若者たち 8 人は耳を傾けた。レポートを几帳面に寄せた松本は，中途採用で，就労しても，すぐに退職の繰り返しであった。極度のうつだと周囲は思っていたが，統合失調症であった。次の仕事が見つかるまで，家族のように縁が深まり，2018 年，岡山県倉敷市真備(まび)町箭田(やた)の洪水，広島県呉市の被災地にも参加した(1 ページ参照)。

第 8 次東北ボランティア　一番手前が松本真祐さん。
2012 年 1 月 17 日。宮城県石巻湾沖で。撮影 岩村義雄

[1] 拙論「あなたはいつ抑圧された人に寄り添うのをあきらめたのか」(神戸新聞会館 2021 年 8 月 30 日 3 頁)。
[2] 拙論「キリスト教と福祉―新型コロナウイルスの救い」(神戸国際キリスト教会　2020 年 4 月 19 日 12 頁)。
[3] 拙論「障がいをお持ちの方との縁」(兵庫キリスト教障害者共励会 ‘しあわせの村’研修館ホール 2012 年 10 月 8-9 日 4 頁)。

2014 年 11 月 30 日，川井浩三さん(75 歳)が香川県から日曜礼拝に息子拓さん(39 歳)を連れて来た。統合失調症の息子の相談を受けた。息子の拓さんが東北ボランティア(12 月 21-24 日)に参加することになった。クリスマスの時節であり，石巻市の障害者の施設祥心会の 7 ヶ所，および渡波の独居の高齢者をサンタクロースの衣装で訪問し，交流した。

左側 川井拓兄 宮城県石巻市ひたかみ苑 2014 年 12 月 22 日 撮影 岩村義雄

拓さんは外見からは障がい者とは判断できない。車も交代で，運転し，農作業も積極的で，にこやかで出会う人に好印象を与える。熊本・大分地震(2016 年 4 月 14 日,16 日)益城町での炊き出しボランティアにも参加。東北ボランティアに申し込んでいた大島健二郎(38 歳)さんは，熊本行きに合流した。拓さんとは，同病相憐れむ式にすぐに親しくなった。700 食分の炊き出しの協働作業に仕えた。二人とも 30 代前半で，体力，知力，俊敏な判断力があり，現地の被災者たちから感謝された。有能さにおいて，健常者より卓越した知能を発揮した。益城町の行政の教育課の人たちも二人の誠実さを褒めた。神戸国際支縁機構にとり，貴重な事務局メンバーになっていく。ただし，自分はもうだいじょうぶと慢心し，薬を服用しないと，統合失調症の症状が顕在化する。幻聴，幻視という異常なものに怯える。極度に落ち込んだり，無気力状態に陥る場合がこれまで何度もあった。それでも，健二郎さんは，自発的に，単身，熊本市に 3 年移住し，週 3 日のアルバイトをしながら，余暇に傾聴ボランティアを展開した。現在も，神戸国際支縁機構の熊本支部長として責任ある立場を担っている。

神戸新聞
2016年(平成28年)6月30日 木曜日

炊き出しが縁 熊本移住

「地震被災者支えたい」

神戸の団体企画 ボランティア参加

今春から正社員の就職先を探そうと考えていた大島さんは、その前に東日本大震災の被災地を訪ねてみようと、一般社団法人「神戸国際支援機構」（神戸市垂水区）による、ボランティア向けバスへの乗車を4月14日に申し込んだ。その後、熊本県益城町で最大震度7を観測する地震が発生。同機構は熊本での炊き出しを急きょ計画し、大島さんも参加した。

同18日に益城町に行くと家々は倒れ、多くの人が避難所に身を寄せていた。初めての被災地に、復興まで時間がかかるはずの。被災した人はどうなるのか」と思った。豚汁などの炊き出しは地元の高校生や被災者と共に準備し、数日、人が列を作った。その後、同機構の岩村義雄代表に移住を勧め、城県石巻市を訪れてから、に自殺した人についての話を聞いた。ボランティアが被災者の心の支えになっていると感じた。「むちゃかもしれないが、一度挑戦してみよう」と考えた。

6月10日、以前訪れた避難所に近い熊本市東区に転居。約2カ月ぶりに避難所で同機構のメンバーと共に炊き出しをすると、被災者から「久しぶり」と声を掛けられた。

「熊本の人は優しい」と明るいが、被災者の日常はまだまだ戻っていない。自分の生活費を稼ぐため、アルバイトで被災した自動車部品工場の補修作業などに取り組む。「まだボランティアらしいことはできていない。『被災者に寄り添うように』と言われるが、すごく難しい」と大島さん。「ただ一人でも、本当に困っている人の支えになることができれば」と願う。

熊本地震被災地の避難所で神戸の団体による炊き出しを手伝った縁から、ボランティア活動を続けるため、熊本市に移り住んだ、岡山県倉敷市でフリーターをしていた大島健一郎さん(31)。地震前まで、ボランティア活動をしたことはなかったが、復興を支える役割に心を動かされた。被災者と同じ空気を吸いながら、自分にできることを探し続ける。（宮田康夫）

被災地に移り住み、炊き出しに取り組む大島健一郎さん＝熊本県益城町と南

『神戸新聞』(2016 年 6 月 30 日)。

他に，伊丹市在住の独居の辻　良雄(65 歳)さんは，2016 年から「カヨ子基金」の里親に自発的に登録してきた。3 年前より，ボランティアにも参加するようになっている。辻さんも統合失調症であるが，4 冊の本を自費出版している。しかし，コミュニケーション能力は限りなくゼロに近い[4]。

第 128 次 前列右側 辻 良雄
2022 年 3 月 20 日

高学歴であろうと，中卒であろうと，ボランティアのはたらきには，分け隔てはない。被災現場にすぐに急行する。プロジェクト，アジェンダ，会議でプランを取り決めてから取りかかることはない。だから，事務能力，計算，立案説明ができなくても，神戸国際支縁機構のスタッフとして重用される。普段から，事務所で，水曜日に発送作業，倉庫管理，農・林・漁ボランティアの備えなど，精力的に携わる。常に少なくとも 3 人の統合失調症のメンバーが加わっている。それぞれが分担し，だれでなければできないというような特別な能力を要する組織ではない。統合失調症のメンバーがこなせないなら，元引きこもり，身体的ハンディキャップ，高齢者が補填している。神戸国際支縁機構は，いわば社会からはみ出た，のけものにされた，相手にされない者たちで構成されていると言っても

[4] 季刊誌『支縁』No.39(2022 年 5 月 1 日 4 頁)。

過言ではない。共通しているのは，笑顔がよいこと，ウソをつかない，最後までやり遂げる忍耐力である。むしろ健常者の方がはたらきにおいて，娯楽，趣味，社会的交友により，むらがある。一方，神戸国際支縁機構の統合失調症の人たちは，家族のようにそれぞれの肢体，手，足，指のように有機的につながっている。失敗があっても，とがめる者がいない現場は，新しいコミュニティの断面図であろう。宗教心があろうとなかろうと，○○兄弟，○○姉妹と呼び合う。「『見なさい。ここに私の母，私のきょうだいがいる。神の御心を行う人は誰でも，私の兄弟，姉妹，　また母なのだ。』」(マルコ 3:31-35)。仏教，神道，キリスト教を問わないで，痛み，苦しみ，怒り，くやしさをもっている人たちに感情移入する。

(2)　路上生活者と協働

第 36 次東北ボランティア(2014 年 2 月 16 日～22 日)に，参加者 17 名は，機構の指導者である薬剤師の本田陽太郎さん，銀行家上田和巳さん，京都大学生 4 名，神戸学院大学薬学部，関西学院大学，関西大学，大阪大学大学院生，小学校教員，神戸市役所，ほっともっと勤務の方々である。

2 月 18 日，例年にない豪雪の宮城県石巻市で，農・林・漁の 3 班，傾聴ボランティアの 2 班に分かれた。

ちょうど全員集合である渡波のセブンイレブン前で，みすぼらしい格好をした男性がいた。路上生活者である。大阪鴻池出身で，宝塚市小浜を経て，6 年間，田町駅で過ごしてから徒歩 4 日をかけて，当地に流れ着いた。名前は，田口政夫さん[1941 年 3 月 7 日生](当時 73 歳)である。震災前に渡波にいたが，3.11の時は仙台に移動していた。神戸からの参加者は，雪の中に，田口さんがひとりぽつんと佇んでいる光景に釘付けになった。極寒にもかかわらず，住む家もなく，暖かい寝具に包まれて睡眠するのでもない。どのように生きているのか，若者たちはとうてい想像すらできない。

それぞれの作業を終えて集まってきたメンバーたちは，決して田口さんを見下げたりする者はいなかった。

すべり台社会から落後した。制度から恩恵を受けることもはじき飛ばされたことは，粗末な服装から推測できる。いすとりゲームのように，努力したものの転がり落ちた者は，もうチャンスはめぐってこない。好き好んで流浪となったのではない。社会からはじき出され，だれにも頼ることが出来ない無縁社会で生き延びざるを得ない。

傾聴ボランティアで戸別訪問していると，渡波の住民がこぼした。2007 年，夕張メロンで有名であった夕張市が破産宣告をしたように，今度，消費税があがったら，ここらも夕張のように干上がってしまうと。限界集落なのに，追い打ちをかけるように不況により，ゴーストタウンになるのだろうかと不安の闇が迫っている。水産の都だった石巻市にかつてのような活気は戻りそうもない。震災失業，倒産，給料の遅延が珍しくなくなっている。そんな地域になぜよりにもよって，田口さんは遠い厳寒の石巻に居続けるようになったのか。都会の高層ビル，娯楽施設，華やかなイルミネーションがなくても，東北人には人情味が残っているからだろう。物乞いなんかしなくても，「これ，食べて」，と，優しさがある。

私たちボランティアは，もう会えなくなるかもしれないと，思うと，だれかれなく，自分たちが持って来たカイロを取り出した。「どうぞ使ってください」，と。凍死しないように祈る気持に，いつまでもバスに手を振っている田口さんの笑顔に一同，点になるまで見つめた。むしろ私たち一行の方が田口さんの笑顔から与えられたことの方が大きいのではないだろうか。

第 82 次 右から田口政夫さん，筆者，藤丸秀浄(法専寺)住職。2018 年 1 月 23 日。撮影 村上裕隆。

第 36 次東北ボランティアのメンバーに，阪神・淡路大震災以降，ご飯が食べられなくなった人たちが神戸市三宮の市役所隣の東遊園地にいるとの情報があった。東日本大震災以降，機構と二人三脚で弱者に仕える新生田川共生会の有川善雄代表は 2013 年 7 月に逝去。炊き出しが中断していた。炊き出しをする後継者がいないからである。路上生活者にお会いしたメンバーたちの中で，中野彰太さん(関西学院大学)，坂本圭子さん(神戸大学)が神戸に戻って，炊き出しをしたいという希望を発した。神戸に戻り，事務局に集まった。調理の資格のある者，どのように食材を集め，どこでだれが調理をすべきか，まったくゼロからの取り組みが始まった。2014 年 3 月 29 日，機構の本田哲郎理事(釜ヶ崎ふるさとの家)が二回目に集まった有志たちに助言した。キリストの道の聖職者らしく「炊き出しする側にではなく，炊き出しを受けねばならない側に，キリストはおられる」という励ましを与えた。

資金ゼロからの出発

米，食材などの調達，調理場所は岩村義雄が引き受ける条件で，調理は Hotto Motto で弁当を作っている楠元留美子さん，開始するにあたり，調理道具などを購入する資金のない機構に，「阪神宗教者の会」の西福寺，玉龍寺，釜ヶ崎の川浪剛僧侶(支縁のまちネットワーク)のところから食材など不思議な方法で備えられた。

話し合いの翌週，2014 年 4 月 5 日，川浪剛僧侶から食材を釜ヶ崎で受け取ることができた。

東遊園地(神戸市役所隣)の路上生活者に温かいうちに提供するように，調理場所探し。神戸フィラデルフィヤ教会（大嶋善直協力牧師，金起賢牧師&李永蘭先生ご夫妻）の 2 階を使用する契約が交付できた。それも無料である。なにもかもが順調な滑りだしだった。

五百井正浩(玉龍寺)住職，藤丸秀浄(法専寺)住職，横山豊宥(無障金剛院)住職，豊原正尚(西福寺)住職，後藤由美子(光円寺 第 20 次)僧侶たちからの寛大な米提供，フードバンク関西の協力も大きな後ろ盾になっている。機構の「耕支縁」（神戸市西区友清）の新鮮な無農薬，有機の野菜類が岸本豊さんから補充されている。

炊き出し開始

2014 年 4 月 17 日，はじめて機構の大鍋に吸い物，弁当を抱えて，ハイエースで東遊園地に運んだ。気さくな竹田さん，堀 浩一さんたちと毎週お会いするようになる。初日には，毎日新聞の湯谷茂樹記者も居合わせた。

戸惑いと，たくさんの不安を抱えながら，毎週木曜日の炊き出しは始まった。

いつも，何か時間に追われているかのような A さん，神戸のメインロードのフラワーロードを横目に見ながら，簡易ベッドに横になり，柵には，温度計を吊るし，夏には，自身と，二匹の親子の愛猫の為，蚊取り線香を焚く高橋さんは，博学で，読書好き。廃品回収の“目利き”で，生計を立てている。

驚くべき論客で博学の礼儀正しい大田さん，いつも，一緒に待っていて下さる大槻さん，沖縄出身の石川さんには，猛烈台風の情報や，南国の果物のことを教えていただいた。

神戸市東遊園地の炊き出しに並ぶのは，当初，12 人。現在は 4 人に減少。機構は，生活保護を神戸市から支給されていない路上生活者を対象にしている。大槻さんは，一週間に一度だけ，ちゃんと調理した食事を食べている。そのため機構の炊き出しを楽しみに，受け取るやいなやすぐに口にしている。現在も単身で野宿生活をしている。神戸では，生活保護を受給(月に 12 万円)している人たちは約 120 人。5 つの教会が交代で火曜日，木曜日，土曜日の週 3 回提供している。また年末には東遊園地で大がかりな炊き出しが神戸の風物となっている。したがって，機構の炊き出しを受け取っているメンバーたちは，週 3 回の大きな列には並んでいない。

路上生活者の堀さんが，炊事の班長を 3 年前から担うようになった。神戸市の地下駐車場を住まいとしていた。調理は素人と思えないほど，熟練している。4 年前から東北ボランティア，球磨川(熊本豪雨)ボランティアにも同行するようになった。2022 年 8 月から，神戸市垂水区の住居に住み，生活保護を受けながら，神戸国際支縁機構のボランティアの主要なメンバーとなっている。

東遊園地での炊き出しの歩みが，被災地で，体育館などに避難している被災者と寄り添う活動につながっていった。2018 年 7 月 7 日，岡山県倉敷市の水害発生と同時に，倉敷市立第二福田小学校へ神戸国際支縁機構は向かった。2 日目から，筆者は第 7 次ネパール・ボランティアに平澤久紀さんと向かっていた。東遊園地で積み重ねた成果が発揮されたとしか言いようがない。

炊き出し，「田・山・湾の復活」の農・林・漁ボランティアだけではなく，戸別訪問を通じて，生き辛さを感じている人との出会いがある。

欧州から日本国神戸市に共に帰国したウクライナ人ロラ＆ヴィクトールさんは，炊き出しを手伝う。2022 年 7 月 7 日。

(3) ハンディキャップへの共振

神戸国際支縁機構にとり日本の災害の原点と考えている福岡県朝倉市杷木(はき)松末(ますえ)がある。2017 年 7 月 5 日の豪雨で，死者 41 名不明 1 名。7 月 7 日から杷木中体育館で炊き出しに仕え，廃村になった松末の被災者との縁ができた。農業再建が許可されない中で，復興のためのそばづくりにも協力した。合間に復興住宅を戸別訪問。佐々木美和(「カヨ子基金」代表)が 2021 年，岩本眞子さん(68 歳)と出会った。二人の精神障がい者の息子(48 歳)，娘(45 歳)を育てている。夫の久吉さんは車椅子生活である。

第 30 次球磨川(熊本豪雨)
ボランティア　岩本久吉さん
2022 年 9 月 5 日。
撮影 佐々木美和。

9 月 18-22 日，第 134 次東北ボランティアで，園児たちと稲刈りをした。地元の新聞にも取り上げられる。しかし，神戸国際支縁機構が首尾一貫しているはたらきは，農・林・漁ボランティアではない。もちろん自然生態の回復も重要であろう，しかし，最もたいせつなことは，人間の弱さを共有し，結び合い，支え合う関係になっていくことである。そのために，一軒ずつ，ドアをノックする。呻き，孤独に苦しみ，苦難の海でおぼれかかっている人々の「場」に出かける。「小さくされた人々」とは，「小さくされた神々」である。相互に縁を築くと，その関係は，いのちがゆらぐ社会にあって，もう苦海浄土という無人島ではなく，手と手が触れ合う「間」がある。社会的孤立者ではない。なぜなら毎月最低一回は，訪問し，霊的健康をケアすることができているからである。友情が育まれている。笑顔になる。いかなる富，物資，利益よりも価値がある。障害者の「害」という差別などは雲散霧消となる。障碍の「碍」の生きづらさも忘失している。だれも上からのエクスーシア(権威・権力)によってもたらされた無理強いを感じていない。

事務局の野田健二さん(72 歳)は足が悪く，杖をつきながら，農作業で汚れたままの服装で，戸別訪問する。貝のように他者にはこころを閉ざしている独居の高齢者も，玄関で野田さんの顔を見ると，口元がゆるむ。神戸国際支縁機構の他のメンバーにない賜物である。健常者が 1 分かかる距離を 10 分かけて歩く，かたつむりのような動きである。そのゆったりしたテンポが効率，能率，便利さにとうていついて行けない人々にとり，救いとなる。

「キュアからケア」,「ソーシャル・キャピタル」や「福祉○○」も無価値とは言わない。しかし，いつしか政治家，官僚，財界などが「公共性」を宣伝するための便利な下部組織となってしまった。

日本などの福祉現場はすでに社会の支配者―被支配者の構造ができあがっており，担当する工程が専門化されている。機械的にクライアントに接しているにすぎない。辛い，汚い，単純な労働は低賃金を得るための経済システムで運営されている。人と人の温かい交流，血の通った対話，鼓舞する笑顔すら途絶えてしまっている。現場の仕事は，東南アジアからの研修生たちに委ねられ，管理職はゴルフを興じている。

“反知性的ともいえる「ケア」”の倫理を実践している宗教は公共の「場」から排除されてきた。最も根源的なものが黙殺される日本は，新型コロナウイルスを契機に「ひとり」をたいせつにする「福祉」「慈善」「ボランティア」に立ち返らなければならない。

そばにいる，「共生」Live together，「共苦」Share sufferings，「苦縁」Relationship to share sufferings が求められる。よだれを垂らして，口臭がひどい，悪態をつくような人々であっても寄り添うこころさえあればだれにでもできるのである。 専門家，下働きの奴隷，便利なツールが求められているのではない。「被災者」,「病人」,「貧者」が「魂」(soul ソウル)である。そうしたはたらきにふさわしいのはだれか。

高学歴，最高裁判所の判事，大学教授，医師など社会的エスタブリッシュメント(既得権益層)が多くいるから信用が得られると錯覚してはならない。勘違いをしてはいけない。またグループの仲間に社会的地位，評価，収入が多いメンバーがいることで誇ってはならない。神が窒息状態，疲弊しきった地球，自国・自我優先の末期現象の地球を新しく「復興」させるのに用いる器は一貫して「無に等しい者たち」である。「きょうだいたち，あなたがたが召されたときのことを考えてみなさい。世の知恵ある者は多くはなく，有力な者や家柄のよい者も多くはいませんでした。ところが，神は知恵ある者を恥じ入らせるために，世の愚かな者を選び，強い者を恥じ入らせるために，世の弱い者を選ばれました。また，神は世の取るに足りない者や軽んじられている者を選ばれました。すなわち，力ある者を無力な者にするため，無に等しい者を選ばれたのです」(Ⅰコリント 1:26-28)。日本の法律の中には，「復興」の明記がない。定義がないのである。古い革袋に新しいいのちの水を注ぐ鍵をもっているのは，抑圧，差別，偏見をもたれてきた「路上生活者(ホームレス)」,「統合失調症，分裂症，うつと言われた方々」や「ハンディキャップの者たち」である。彼らの生きざまに示されている。機構のだれも表彰状を一枚ももらったこともない。また助成も行政から一円もいただいたことがない。全国の応援してくださる方々の月 200 円の維持会費でまかなわれている。被災者に対して，「まことに私は主，あなたを癒やす者である」，と証しについて口ではなく，行動で実践している。